It's KONAN Style スタイル
さまざまな分野の第一線で活躍する卒業生

小説家として受賞作を超える2作目を書くことが今の目標

初めて小説を書いたときは、
楽しくて寝食を忘れるほどだったという遠藤さん。
それほどまでに何かに没頭した経験は初めてで、
そのとき小説を書くことを仕事にしたいと強く思ったそうです。
以降8年間、毎年新人賞に応募し続け、宝島社が運営する
『このミステリーがすごい!』大賞・文庫グランプリを受賞。
2024年2月、『推しの殺人』で小説家デビューを果たした遠藤さんに、
受賞までの道のりやこれからの活動について伺いました。

PROFILE

小説家・会社員
遠藤（えんどう） 辰良（たつよし）さん

2010年、法学部卒業。化粧品メーカーに勤務するかたわら小説を執筆。第22回『このミステリーがすごい!』大賞・文庫グランプリ受賞。2024年に宝島社文庫『推しの殺人』でデビュー。ペンネームは、遠藤かたる。「かたる」は、「騙る」と「語る」のダブルミーニング。由来は「小説家は嘘をつくのが仕事である」と言われているところから。

休日のある日、ふと思った小説を書いてみようと

「だらだらと休日を過ごしていたとき、ふいに自分にも書けるかな、と思って」。遠藤さんが小説を書き始めたのは、大学を卒業し、社会へ出て7年目の春。頭の隅に覚えていたのは、学生時代にサークルの先輩が小説を書いていたことだった。それまではどこか高尚なことだととらえていた小説を書くことが、意外と身近に感じられた出来事だ。

興味本位で書き始めると、思いのほか楽しかった。「最初の一作はプロットも作らず、頭の中のぼんやりした物語を全部バーッと文字に具現化していく感じでした」。初めて書いたのはライトノベル系。1週間で約10万字ほどの作品を一気に完成させた。「書き上げられたことに自分でも驚いて。ひょっとして天才なんじゃないかと思いました」と、笑う遠藤さん。そのときの達成感が忘れられず、小説を書き続けることになる。

ただ書き続けているだけでは文学賞には届かない

記念すべき第1作目を文学賞に応募するも、敢えなく落選。2作目、3作目と、書いては応募したが落選が続く。「あぁ、自分は才能がないんだなと思いました。だけど、そこからが本当のスタートでしたね」。才能がなければどうするのか。自分の持ち札をどう生かすのか。それからは書くものに対して、より自覚的になった。今の時代に求められていることは何かを考察し、分析しながら書くようになり、小説のジャンルもライトノベル系から、ミステリーへと舵を切る。

ミステリーを選んだのは、書きたい気持ちがあったことはもちろん、文学賞が多いことも理由の一つだ。小説家になるには、文学賞の受賞が登竜門となる。本が売れないと言われる昨今であっても、ミステリーはファンが多く、読者を獲得できるジャンルだ。そのため出版業界は、ミステリーが書ける新人作家の発掘に積極的で、各社・団体がさまざまな文学賞を設けている。

『このミステリーがすごい!』大賞に照準を合わせたのは、予選通過作品はWebに講評がアップされることも大きな理由だ。独学で書き進めている者にとって、プロの書評家から作品の良い点、悪い点を具体的に指摘される貴重な機会であり、とても勉強になる。何度も応募するうちに、遠藤さんの作品は予選を通過し、上位に残るようになっていく。

スリリングな展開が唸らせる受賞作『推しの殺人』

第22回『このミステリーがすごい!』大賞・文庫グランプリを受賞した作品は、地下アイドル×殺人隠蔽という物語の核となるアイデアが生まれた時点で、手応えを感じたそうだ。「これをしっかり書くことができれば、受賞できる。逆に受賞しなければ、自分の力不足」。そう思うほどアイデアに自信があった。応募締切当日のギリギリまで使って書き上げた物語は、推敲する時間もなく応募。5か月の審査期間を経て、受賞の知らせを受けた。2024年2月、全国の書店に『推しの殺人』が並ぶ。「大阪にある紀伊國屋書店梅田本店では、レジ前スペースに平積みで並べていただきました。その光景を目にしたときは、とても感慨深かったです」。

2作目、3作目と出すことが出版社への恩返し

小説家となってからも以前と生活のペースは変わらない。平日は企業に勤め、帰宅後の夜や休日で創作に取り組む。2作目に向けて、通勤などのちょっとした合間も構想を考えていることが多い。「出版社には本の制作はもちろん、宣伝など、かなりバックアップしていただいているので、無名の新人である自分に投資してもらった恩を作品で返したい」。

遠藤さんの創作の源になるのは映画やドラマ、小説だ。企業で働いてきた経験や大学時代の思い出も、引き出しとして生きているのだろう。甲南大学の学生だったころについて尋ねると、思い浮かぶのは「友人たちと駅前のマクドナルドで何時間もしゃべり倒したり、大衆居酒屋でたくさん飲み、カラオケで朝を迎えるような、なんでもないようなことばかり」。『推しの殺人』は、アイドルたちのテンポよい会話も読みどころの一つだが、そこに醸し出される空気感は学生時代の遠藤さん自身のものかもしれない。

最後に、次作の構想や物語の舞台に関するアイデアについてもお聞かせいただいた。しかし、それは本となってからのお楽しみとしておこう。

ハラハラする展開にページをめくる手が止まらない。
『推しの殺人』の帯は AKB48 元メンバー、
松井咲子さんからのコメント入り！